

紆余曲折、韓国滞在 10 年記

第 3 回 CLAIR・ソウル編 ー地方外交の黎明期ー

ソウル事務所の立ち上げ

4年にわたる在韓国日本大使館での勤務を終え、帰国し、ビザが発給されるまで自治体国際化協会(CLAIR)本部で勤務することになりました。久しぶりの日本勤務ですが、戸惑うこともありました。

それは通勤ラッシュです。ソウルでは自動車通勤でしたので、帰国した数日間、都内に通う満員電車に乗るには少々「勇気」が必要でした。

しかし、日本人の整然と並ぶ姿や物静かな通勤風景は驚きました。

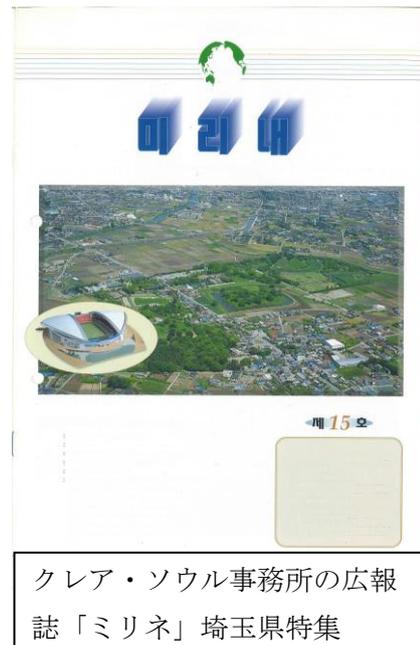
そして、改めて時間の正確さや約束の遵守、店での丁寧な対応など日本の良さと細やかさを再認識しました。他方、融通の利かなさに少々戸惑ったことも覚えています。

ソウル事務所の開設は 1993 年 10 月と決まり、再び韓国ソウルの地を踏むことになりました。ソウルへは、所長と私の他に、3 県 2 市から職員が派遣されました。しかし、まだ事務所はありません。

まずは法律事務所との契約、物件選び、間取り、内装、事務用品や図書の購入、そして現地職員の採用、職員の住むマンション探し等、するべき仕事は多岐にわたりました。日本から派遣された県や市の職員は地元の期待を一身に集める優秀な人ばかりでした。事務所はまだ殺風景でしたが、職員のやる気と使命感で溢れていました。

何も無いビルの一角が、徐々に事務所の形を呈し、担当を決め、組織を作り上げていくのは、無から有を作る面白みに溢れていました。

大使館とは異なり、CLAIR ソウル事務所の業務は、日韓の地方自治体の活動に特化したものです。主な業務は、日本の自治体の海外活動支援や関心が高い分野の調査・研究、特に参考になるテーマはクリアレポートとして発信します。また韓国の地方自治体への情報提供、日本の地方自治制度や参考となる事業の紹介、県や市の職員による行政体験の紹介 セミナー開催、姉妹都市交流・締結への助言など、地方自治体に関することは何でも行います。職員は帰任の際にレポートを作成しますが、これは職員の卒論のようなものでした。



日本の地方自治への高い関心

韓国では1991年に地方議員選挙が実施され、自治団体長の公選は1995年6月に実施されることが決まっていました。日韓地方職員の交流会やセミナーを各地で開催しましたが、財政、議会と執行部の関係、情報公開制度、条例制定などに強い関心が示され、日本の様々な事例を求められました。議場の設計図や議長と議員が座る椅子の寸法の資料要求などがあったこともありました。また日本の地方自治体との交流を通し、経済的・具体的な成果がほしいとの要望も多く寄せられました。日本の地方自治への関心は、非常に高いものでした。

1990年代、国際交流から協力の時代へー日韓地方外交の黎明期ー

日本では80年代の海外渡航ブームが依然として続き、年間100万名ほどの日本人が韓国を訪問していました。韓国では89年に海外渡航が自由化し、相互訪問は年間200万名に迫る時代でした。また、この時代は、日本の地方自治体にとり、地元空港の活用、特に国際航路の開設が急務でした。距離的に近い韓国との航空路線開設を多くの地方自治体が目指していました。

従来、日本の地方自治体の交流は、姉妹関係にある外国自治体との親善交流が主なものでしたが、90年代はそれ以外の外国自治体との接触や交流が進んだ時代でした。外国との交流を受動的に受け止めるのではなく、積極的に関与していく姿勢に移りつつある時代でもありました。また数年後には都道府県や政令市に対し、英語による入札手続きが求められるなど、国際社会の一員としての義務も負わなければならない時代になっていました。日本の地方自治体に対しては、地域や住民の福祉向上のための専門技術を生かした、いわゆる「草の根の国際協力」が求められる時代であったとも言えましょう。

韓国では地方議会に続き、自治団体長の公選が予定される、言わば地方自治の黎明期でした。日本の地方自治体の経験や成功例を学びたい、参考になる点は取り入れたいという期待も大きなものがありました。一方で「日本の地方自治で失敗した例を教えてもらいたい」などという、いささか失礼な要望も多々ありました。ストレートな韓国風の考えや物の言い方なのですが、だいぶ戸惑った記憶があります。

毎年、日韓の地方自治体職員がテーマごとに意見交換を行う「日韓自治体交流会議」も日韓相互で開催され、姉妹関係にある地方自治体の職員相互派遣や日本の自治体のソウル事務所開設など、目に見えて日本の地方自治体の職員が韓国で活躍する時代となって来ました。一時期は、韓国に派遣された日本の自治体職員が30名を超えるようなこともありました。今の日韓関係からは考えられない時代でした。

仕事以外も充実した時期でした。休日は地方の寺院や深山にある石仏を訪ねて韓国中を歩きまわっていました。幸いにも博物館の図録や論文の翻訳、仏像の連載記事の翻訳など多くの翻訳に携わることができ、ささやかな論文も上程することができました。現地に赴き、十分に対象に接する時間もあり、一研究者としても充実した年月を送ることができました。

CLAIR 会長の来韓 一次への展開の始まりー

CLAIR ソウル事務所に派遣される地方自治体の職員は任期が2年で、その後は地元の自治体(派遣元)にもどります。私は本部採用ですので、野球やサッカー選手のように毎年ごとの契約でした。一応、4年間で目途ですので、そろそろ次の展開を漠然と考えていました。

そんな折、CLAIR の会長である土屋義彦埼玉県知事が10年ぶりに韓国を訪問されることになりました。私が埼玉県出身であることから、土屋会長と特別秘書のアテンドを任されました。帰国される日、埼玉県が日韓共催となった2002年のワールドカップサッカー大会の開催地であり、韓国との交流や国や地方の事情に詳しい人物を探しているとの話を聞きました。その後、関係する方々の推薦もあり、地元の埼玉県に臨時職員として勤務することが決まりました。



土屋知事とサッカー日韓戦を視察
ソウル蚕室競技場にて

10年という紆余曲折の年月を経て日本へ帰国することが決まりました。

その後、埼玉県では外国要人の来県や知事訪韓団、ワールドカップサッカー大会などに係りましたが、韓国で築いた人的ネットワークには助けられました。運よく、友人の内務部職員が韓国ワールドカップ組織委員会委員長の秘書に、また別の友人が大統領府に派遣されるなど、訪韓の際やワールドカップ大会の会議などでは韓国でのネットワークを活かすことが出来ました。

最後に、ー「国際化」から「グローバリゼーション」へー

私が韓国で働いた時期は、「国際化」が叫ばれた時代でした。では現在、盛んに言われる「グローバル化」と「国際化」はどのような違いがあるのでしょうか。どちらも日本以外の国との関係や状態を示す言葉です。明確な意味づけは困難ですが、自分なりの解釈をしておく必要があると思います。「internationalization」は「国際化」とか「国際的」と訳され、この訳語は歴史もあり広く定着しています。しかし、「globalization」は「地球規模化」などと訳されることがあるものの、なにかしっくりした訳語がないように感じます。

私の場合は、日本と韓国の歴史や文化、国と地方の関係など、その同質性や異質性など「日本対韓国」、いわば「国対国」という視点が中心でした。日本から世界を見る、外国とどのように接するか、どのようにお互いを考えているのか、どのように協力し合うか等、あくまでも限定された「国対国」の地域的な視点であり、国ごとの違いを前提に重きが置かれていました。それに対し、国という概念を離れ、世界を国境の無い丸い「土俵」と捉え、

そこに共通のルールや普遍的な価値観を共有、認識した上で対峙していくのが「グローバル化」と言うことが出来るかもしれません。

「グローバリゼーション」を生き抜く

近年の世界は従来の考えや既存の体制が崩壊しているように感じます。国家間の枠組みも緩くなり、情報や資金も従来の枠を超える速さと規模で世界を駆け回っています。世界の裏側で起きた事件や事象は、瞬時に日本や私たちの生活に直結してきます。このような時代に、私たちが生き抜いていくには、どうしたらよいでしょうか。

私は、韓国で過ごした経験と日本を取り巻く現在の状況から次のようなことが、我々に求められていると考えています。と言いましても、私がすべて実行できているものではなく、あくまでも理想として捉えてください。

まずは、

①コミュニケーション力を持ち、伝達する力を鍛える。単に語学が出来るだけでなく、自分の意思を伝える伝達力が必要です。

②次に、多文化、多様な考えや価値観を許容する心を持つ。その為には、単眼ではない複眼的な観察力と想像力、構想力、そして行動力を持つ必要があります。文化や歴史はもちろん、宗教にも幅広い知識と理解が必要でしょう。

③また、一人の人間として「幅広い教養」と「普遍的で論理的な思考」を持つ。それに加えて、専門的な知識も求められています。

それも実際に使える、いわば食べることのできる専門性です。職業的な分野での専門性、事業的な分野における専門性、地域的な分野での専門性すら求められましょう。

④最後に、自分を育み育てた自国の文化と歴史を理解する。私は、自国の文化や歴史を知らない人物は尊重されないことを様々な場面で実感してきました。まずは「日本人たれ」と言うことです。

世界の国境はさらに低く、ボーダレスとなり、情報の伝達や資金の移動は世界規模で超高速化しています。今まで以上に、我々は世界の人々と同じ舞台上で活躍し、勝負していかねばなりません。近年、多くの日本企業では多国籍な人々が働いています。国内での日本人同士の競争の他に、我々は世界中の人々との競争に勝ち抜かねばならない時代に入っています。

そのためにも学生の皆さんはもちろん、私にも、日本を知り、語学はもちろん、複眼的な観察眼を持ち、様々な知識を得て異文化を理解し、それを己の物にしていく包容力が求められていると考えています。

これで三回にわたるリレーエッセーを終わらせていただきます。皆さま、ありがとうございました。

終わり